Gyahun

人生の真実を探る ZINE

13

生涯現役

5つのヒント

人生の
〈戦略〉と〈戦術〉を
とりちがえない

ノートと
友だちになる

プレミアムな体験を
つくる

お金ではなく
時間を貯める

日常の幸せを
科学的に見つける

きゃ

Gyahun ⑬試し読み版

Gyahun

13

Gyahun工房

もくじ

特集 生涯現役 5つのヒント

6 〈生涯現役〉のために「すべきこと」ではなく「したいこと」を考えたい

8 生涯現役のヒント① ノートと友だちになる

10 起死回生のアイディアはネットではなく自分の頭から探したい

10 僕たちが老人になったらパソコンを使いこなせないかもしれない

14 生涯現役のヒント② 人生の〈戦略〉と〈戦術〉をとりちがえない

20 〈アメリカの敏腕弁護士〉と〈日本の山ガール中学生〉から学ぶ幸せの法則

20 僕たちの手のなかにあるiPhoneは何の問題も解決していない

25

30 生涯現役のヒント③ プレミアムな体験をつくる
30 僕たちはいつの間にか「面倒くさいこと」を求めていた
34 自分の人生をアナログで設計するとワクワクが止まらない
42 生涯現役のヒント④ お金ではなく時間を貯める
42 時間とお金のどちらが大切か その答えを僕たちはすでに知っている
47 自分の寿命の〝出納帳〟をつけて時間の浪費を防ぐ方法
52 生涯現役のヒント⑤ 日常の幸せを科学的に見つける
52 毎日のなかに〈幸福〉を見出すのは意外に簡単なことだった
57 幸せを見つけるため〈工房〉をリニューアルしてみた
40 Gyahun 工房 2021年のお仕事
62 『Gyahun』制作メモ

2022 年のテーマカラー「蜜柑色」

Gyahun 工房では、毎年テーマカラーを決めています。
今年は「蜜柑色」。いうまでもなく果物のミカンの色です。
ミカンは大好物なのですが、気づけば最近はご無沙汰。

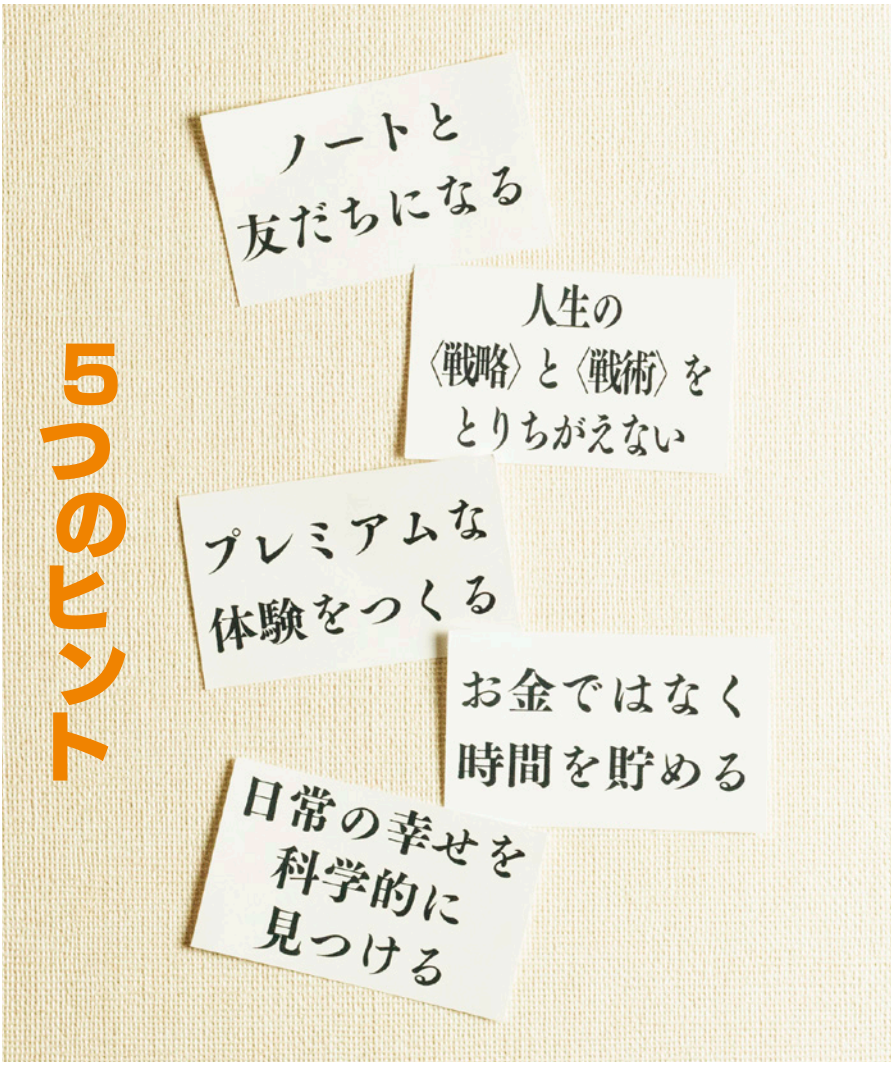
特集

生涯現役

〈生涯現役〉で人生を送りたい？

「そうしたい！」というあなたには、
今回の特集が、少しだけ人生の役に立つかもしれない。

「そんなの嫌だ！」と思うあなたも、ぜひ目を通してほしい。
〈生涯現役〉をめざす者がなにを考えているか。
それを知るのもけっしてムダではないはずだから。


5つのヒント
ノートと
友だちになる
人生の
〈戦略〉と〈戦術〉を
とりちがえない
プレミアムな
体験をつくる
お金ではなく
時間を貯める
日常の幸せを
科学的に
見つける

〈生涯現役〉のために「すべきこと」ではなく「したいこと」を考えたい

〈生涯現役〉は、２つの視点から考えられると思う。

ひとつは、「人生１００年時代」において、〝死ぬまで働く〟ための〈生涯現役〉。会社を定年退職したあと、年金の受給まで時間がかかる。それまでどうやって生きていくのか。最悪の場合、食べていくためのお金が尽きるかもしれない。あるいは、貯金は十分にあって食うには困らなくても、会社を辞めた途端、生きがいを失ってしまうかも。だから、〈生涯現役〉をめざす。

そこには「〈生涯現役〉でなければならない」と義務感が含まれている。すると、「老人の人材活用はどうする?」「どんな支援制度が必要になるのか?」などと、政治や社会問題のテーマとして語られることになる。それはそれで重要な議論ではあるけれど、今回はとりあげない。

もうひとつの視点は、「ＦＩＲＥ（ファイア）」の対義語としての〈生涯現役〉。ＦＩＲＥとは

「Financial Independence, Retire Early（経済的自立・早期退職）」の頭文字をとったもの。「お金のために嫌な仕事をすることから解放され、自由に生きていくこと」といった意味だ。多くの人が抱くイメージとしては、海外に移住し、自由気ままに暮していく。仕事はまったくしないわけではないが、お金を得るためではない。生きがいとか自己実現を目的とする、といったところか。FIREは「経済的自立」に重きを置いているわけだから、必ずしも〈生涯現役〉と対立するわけではないが、どうしても二者択一のように錯覚しがちだ。FIREは、どちらかといえば「サラリーマン」とか「社畜」に対するアンチテーゼの意味合いが強いように思う。つまり「サラリーマンでない生きかた」という定義づけだ。

今回とりあつかう〈生涯現役〉は、「〜しなければならない」といった義務感や、「〜でない」のようなアンチテーゼから考えるものではない。

「〈生涯現役〉でいたい！」という、単純で純粋で素朴で、だからこそ揺るぎない人生の目標だ。

今回は「〈生涯現役〉でいるために、なにをすべきか」ではなく、「〈生涯現役〉でなにをしたいか」という視点から、5つの指針をまとめてみた。ただし、きわめて個人的なものも含まれている。単に「ぼくのかんがえたさいきょうのじんせいてつがく」に堕している恐れも十分にある。一方で、だからといって、あなたの役に立たないともかぎらない。

巷で取り沙汰されている〈生涯現役〉とは少し異なる視点から人生を見つめなおす。そのきっかけにしてもらえれば幸いだ。

生涯現役のヒント①

ノートと友だちになる

生涯にわたって付きあえる“真の友”を見極めたい。

起死回生のアイディアはネットではなく自分の頭から探したい

2020年11月半ば。工房の電話が鳴る。最近は「電話が苦手」という人も多いと聞くが、本誌は嫌いじゃない。連絡はメールやチャットアプリが主流となっている昨今、電話がかかってくると、仕事の依頼であるケースが多いからだ。

電話をとる。聞こえてきたのは、なじみの編集者の声だ。

「12月のお仕事の具合はいかがですか？」と、スケジュールを打診される。

「そこそこ埋まっていますが、お手伝いできる余地はあるかもしれません」

「マナー本のお仕事があるのですが」

マナー本はサラリーマン時代に何冊か手がけたことがある。今回は著者の本から材料を調達して再構成していけばいい。そんな説明を受けた。だとすると、制作期間は2〜3週間といったところかと、スケジュールを見積もった。とくに難しい仕事ではないように思えた。

電話をかけてきた編集者と、今回の担当者は別とのこと。当人とあらためて打ち

合わせをすることになった。本来なら、自分から編集部におもむき、初対面の挨拶を兼ねた打ち合わせになる。しかし、そのときはコロナ禍。Zoom（オンライン会議）による面談となった。

「いままでにないマナー本にしたいと思っているんですよ」

担当者の説明に、心がざわつく。「ん？　ひょっとすると、これは簡単な仕事ではないのでは？　とんでもない過ちを犯してしまったのではないか……」

そもそも「自己啓発」とはなにかを知らない

マナー本はいわゆる実用書に分類される。担当者によれば、今回はそこに自己啓発書の要素を加味したいという。

さて……。「実用書に自己啓発書の要素を加味」。言葉の意味は理解できるが、実際にどのような本にすればいいのか？

後日、編集部から段ボール箱が届いた。箱を開くと、数十冊の本。今回の仕事の資料だ。あとから追加で本が送られてきたり、自分で買ったりしたので、工房は本の詰まった段ボール箱であふれた。いよいよ「簡単な仕事ではない」ことを実感させられる。

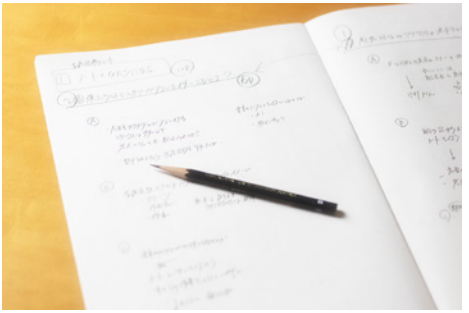
「実用書に自己啓発書の要素を加味」とはどういうことか。あらためて考えてみる。〈実用書〉の部分は簡単だ。「スムーズな名刺交換のしかた」とか「祝儀袋の書きかた」の類い。ふつうの人が「マナー」と聞いて連想するような事柄だ。これらは一定の〈型〉が決まっている。だから、著者の本や類似書を参照すれば書けるだろう。問題は〈自己啓発書〉の部分。「自己啓発書」とはいうけれど、そもそもどんな本を指すのか？　具体的な書名を挙げることはできても、理論的に「自己啓発」を定義するのは難しい。難しいが、なんらかの答えを出さなければ作業を進められない。そこで、「そもそもなぜそんなマナーがビジネスの現場で用いられているのか」「そのマナーを実践することで、どんな利益があるのか」といったことを述べる。それが「自己啓発」になるのではないか。

「そんなふうに考えたのですが、いかがでしょう？」と編集者に確認。

「おっしゃるとおりだと思います」

仕事に行き詰まったときノートに書けば脳が動きだす

これで一歩前進した。しかし、次の試練が待ちうける。自分の仕事は「なんのためにそのマナーがあるのか」の根拠を述べていくこと。根拠なんて知らない。著者



の本をめくっても、そこまで踏みこんでは書かれていない。数十冊の類似本を漁(あさ)りヒントを探すが同様だ。これまでのマナー本は〈型〉を解説するもの。今回の本は「これまでにない」内容なのだから、正解が既刊の本から見つかるわけはないのだ。

ダメもとでネットを検索する。やはり無駄。有益な情報は得られない。

すがるように、ノートを取り出した。「なぜオフィスに着いたら『おはようございます』とあいさつをしなければならないのか」と、テーマを書きつける。そして、頭に浮かんでくるものを書きなぐっていく。しばらくすると、かろうじて材料は集まってきたように見えた。材料を吟味し、優先順序などを判断する。「なんとかなりそうだ」と感触を得たところでパソコンに向かう。この段になって安堵感がわいてきた。書くべきことさえ決まっているなら、ベルトコンベアーに荷物を載せるように、文章にしていくことはたやすい。ほんの数分で、ひとつの項目を書きおえた。

手を動かせば、なにかしらは思いつくから不思議だ。ほんとうに頼れるのはネットではなくノート。それを痛感する。

いったんは安堵したものの、気がかりがあった。この作業を100個の項目について繰りかえさなければならないことだ。

できあがった書籍は40ページ参照。

つづきは正式版で
お楽しみください。

Gyahun 13

© 2022 Gyahun Koubou

2022年1月1日　発行

出版者　　米田政行
発行所　　Gyahun工房　mail@gyahunkoubou.biz